

Title	退任にあたって
Author(s)	寺田, 浩詔
Citation	大阪大学大型計算機センターニュース. 1995, 96, p. 2-2
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/66093
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

退任にあたって

寺田 浩詔

始めに、私事を申し上げることをお許し戴きたいと思いますが、大阪大学に職を奉じて34年余の内で、大型計算機センタの責務に携わったのは、短い期間ではありましたが、公私共に、最も有益な経験でした。その間、ご支援を戴いた学内外の方々は、非常に多数に上り、個々にお名前を挙げる事ができませんが、ここに、衷心から厚く御礼を申し上げたいと思います。

大型計算機センタには、かねてからセンタ運営委員会委員として、かなりの長い年月に亘って、大きな関心を払ってきましたが、センタ長として、責任を持つ立場に置かれようとは、思ってもみななかったことでした。今日でも、痛感していることは、外部から見たセンタと責任のある立場から見たセンタの、理想と現実との乖離が非常に大きかったということに尽きます。

しかし、特に銘記したのは、センタを実質的に支えておられる、事務部の皆様の努力が、さまざまの局面で非常に印象的であったことです。また、センタの運営に当たっては、おおよそその本質を弁えない、甚だしい無理解との遭遇も、ごく少数ですが、経験したことは否定できません。しかし、これも亦、今では懐かしい思い出になっています。何よりも、中尾事務長を始めとする、センタの教職員の皆様方が、ある意味で独断と偏見に満ち満ちた、長期的な計画の具現に向かって最大のご協力を戴いたことに、唯々、感謝の念を表し、繰り返し厚く御礼を申し上げたい心境です。

大型計算機センタの誕生以来四半世紀を過ぎた今日では、目下世間で言う意味とはかなり異なってはいますが、機能の見直しと、将来への発展に向かっての再構築が強く求められています。たとえば、単に研究用の数値計算能力の提供に留まらず、あるいはまた、ネットワークを管理・運営の任務が加えられたと言う現象にも惑わされず、広域的な分散処理環境の一つの核としての、統合的な情報環境形成にどのような役割を担うべきかを真剣に追及することが求められているように思います。今、ただ一つだけ申し上げて置くとすれば、求められている再構築のためには、大胆かつ先見性に富んだ決断こそが必要だということに尽きます。

要するに、ある組織の存立の最大の要件は、余人をもって代え難いと人物について言われるように、学内外を問わず、他の組織では代替できない、独自性の確立に尽きると思います。我が共同利用センタが学内組織に縮退することももちろん一つの可能な選択肢ではありますが、思考様式をほんの少し変えれば、世界的な視野での、発展もまた大いに可能であろうかと期待しております。

これまでのセンタ存続の論理の是非を申し上げているのでは決してありませんが、色々な立場からの、外部の視線はそれほど暖かくないことによく心して、新しい発展が生み出されるよう、心から、期待しております。